

資料紹介 山本明コレクションの 映画資料概要と整理方針

森 岡 洋 史*

1. はじめに

本稿では、人文研が2016年に受け入れた山本明コレクションのうち、図書・雑誌以外の資料群の概要を、その整理方針と併せて簡単に紹介したい。なお、本研究班において、私（森岡）は今井瞳良・竹内信吾とともに主に目録の作成作業に携わった。

山本明（1911～1977年）の社会運動・文化運動への関わりは戦前に遡り、コレクションにも戦前の資料が含まれるが、図書・雑誌以外の資料群の整理作業に関しては戦後の映画サークル活動の関連資料から中心的に取りかかった。

戦後、山本明は1946年1月に日本共産党に入党、日本民主主義文化連盟事務局、関西労働組合映画協議会での活動を経て、1949年9月に北大阪映画サークル協議会を結成した。同年12月にそれを発展的に改組して全大阪映画サークル協議会とし、死去する1977年4月まで同会の委員長を務めた。今回掲載の細目録にある資料の大半は、この戦後の映サ運動に関するものである。

山本明は、映画サークル協議会の運営資料・機関紙・チラシ・上映運動資料、他の運動団体との交流の中で手元に集積した同様の発行資料、さらには映画会社のポスター・プレスシート・ビラ・スチルに至るまで、映画及び映サ運動に関する幅広い資料の収集・保存・整理をおこなった。映画関連以外の資料も含めて、その膨大なコレクションを自ら山本明社会藝能文庫と命名し、生前にはそれらを活用して資料の展示会も開催している。

なお、コレクションのうち図書・雑誌に関しては既に人文研図書室への受け入れが完了して書庫に配架されており、利用が可能である。現在、図書・雑誌以外の資料の目録作成作業を進めている。本稿の前半ではそれら図書・雑誌以外の資料群の整理方針と作業過程について、後

* もりおか ひろし 京都大学人文科学研究所 技術補佐員

半では目録完成部分の資料の概要について、それぞれ概説する。

山本明の経歴については、コレクション寄贈時の添付目録に記載の「山本明紹介」を参考にさせていただいた。

2. 映画資料の整理方針と作業過程

2-1 コレクションの原秩序・原目録と人文研による整理

人文研への受け入れ時、山本明コレクションは1番から300番台までの番号が振られたプラスチックの収納ケース（一部は段ボール箱）に収められており、全体に対して、山本明の長男山本慎一氏による目録が付されていた。以下、人文研による整理開始前のコレクションの保管状況を「原秩序」、寄贈時の添付目録を「原目録」と表記する。

箱の番号は、部分的には連番だが、箱の中身の分類が大きく変わるところで番号が切りの良い数字に飛ばされており、欠番部分も多い。そのため、箱の総数としては120箱前後である。人文研の山本明コレクション研究班は、最初に書誌情報を取得できる図書・雑誌の抜き取りを行い、それらを人文研図書室に回送して蔵書として受入処理をしてもらった。その上で、研究班は図書・雑誌以外の資料群の整理に取りかかった。以下、単に「資料群」と表記した場合は、山本明コレクションのうち図書・雑誌以外の資料を指すものとする。

資料群の多くは、整理番号が振られた数十冊のクリアポケットファイル（クリアファイル）に収められていた。各ファイルには、概ね1ポケットにつき1点乃至数点の形式で資料が収納されていた。比較的個々の資料を確認しやすい保管方法ではあったが、クリアファイルのままではビニールの経年劣化で資料が傷むおそれがあり、長期保管に難があった。そこで研究班の基本的な整理方針として、1ポケットの中身を、元の所属箱・所属ファイル・ポケットの順序がわかる形で、1つの中性紙封筒に移すこと



写真1 収納箱の概観



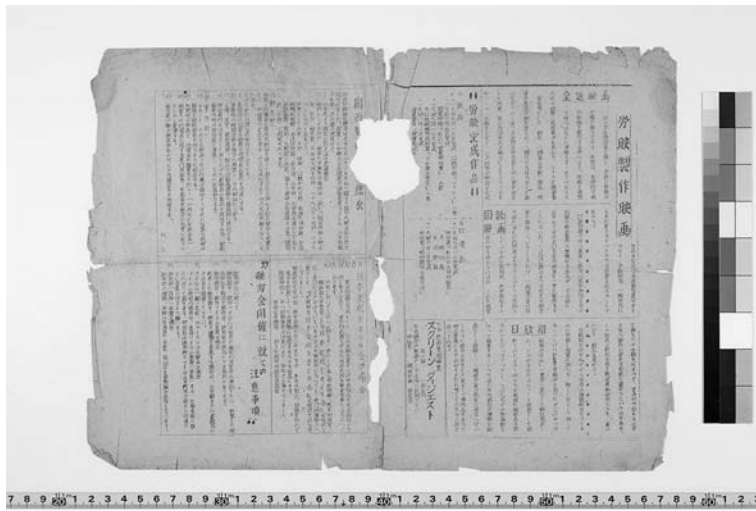
写真2 クリアファイルの概観



写真3 中性紙封筒と中性紙箱

とした。ただし、資料ブロックによっては、数ポケットの資料を1つの中性紙封筒にまとめている場合がある。

映画サークル機関紙や運営資料はいわゆる藁半紙に印刷されたものが多く、酸化の進行や折り目部分の破損でかなり保存状態が劣化している資料もあった。特に状態が酷いものに関しては脱酸スプレーによる脱酸化処理を施した。原則としてポスターなど大型資料以外はほぼすべて中性紙封筒に移すことで、保存環境に関しては大幅に改善された。



(009-01-0049 より)

写真4 劣化・破損の酷い資料

2-2 細目録の作成

原目録のおかげで整理前の段階から資料群の概要を把握することができ、上記の移し替えの作業時に大いに活用させていただいた。ただ、原目録上の記載資料と実際の保存状況にはとどころで細かな異同があり、また、その書式が全体の仕様を統一した上での1行1アイテム・定型項目の形式ではなかったため、そのままでは目録情報から個々の資料へアクセスするには向かなかった。そのため、人文研において資料の現物を一点ずつ確認した上で改めて採録を行い、資料番号を付番し（資料番号については次項で詳述）、新たな研究用の目録を作成した。以下、この新たな目録を「細目録」と表記する。細目録は、原秩序・原目録の分類を踏襲しつつ、研究利用を前提とした書式を採用し、目録情報から当該の資料へ容易にアクセスできることを目標として作成している。

研究班で細目録の書式を検討した際に、映画研究で利用するためには、資料目録で一般的な表題・発行日・作成者などの情報の他に、その資料内で取り上げられている映画タイトルを示す情報欄が必須であるとされた。そのため単に表題・発行日・作成者を拾うだけではなく資料の内容に比較的細かく目を通す必要があり、入力作業の迅速化は難しくなった。本特集号に細目録全体の完成を間に合わせることはできなかったが、結果的には、備考欄等に一般的な資料目録よりも比較的詳細な情報を盛り込むことができたのではないかと思う。

原秩序及び原目録では、図書・雑誌・資料群は「映画」・「演芸関係」・「文学・文化・歴史」・「展示物」など大まかな分野で分けられ（以下、これらを「大分類」と表記する）、さらに

「映画」カテゴリにおいては、資料は発行主体別・刊行物別・テーマ別が入り混じる形で分類されていた。全体的には主に発行主体による分類を採用している箇所が多かったように思われる。この分類の単位が、細目録における「分類」欄に相当する（以下、単に「分類」と表記した場合はこの単位を指す）。個々の資料は各分類の中で概ね発行年順に並べられていた。ただし、分類の中には主要な発行主体・刊行物・テーマや他の意味付けでは括りきれない雑多な資料が集められた箇所もあり、必ずしも全体が明確な分類基準で統一されているわけではなかった。細目録の分類名については、原目録の分類名をそのまま採用した箇所と、採録の際に元の意味付けを損なわない範囲で付けなおした箇所とがある。

同一の資料が異なる分類の中に別々に収められていることも多々見られたが、そういった資料についても原秩序のままとし、資料の所属する分類を変更するなどの操作は行わなかった。

発行主体別の分類を採用したブロックが多いことから、同一の映画、同一のテーマに関する資料であっても、発行主体の違いによって、コレクション内で異なる分類に収納されている場合があった。一例として、コレクションには映画「若者たち」関連資料が数多く収められているが、製作者側や上映運動側といった違いにより、コレクション内のいくつかの分類に散在している。先述のように細目録には「映画タイトル」欄を設け、その資料が関連する映画、その資料内で取り上げられている映画のタイトルを入力し、さらに「備考」欄に可能な限り補足情報を入力している。そのため特定の映画、特定のテーマに関して、横断的に検索することが可能になっている。

2-3 資料番号の付番

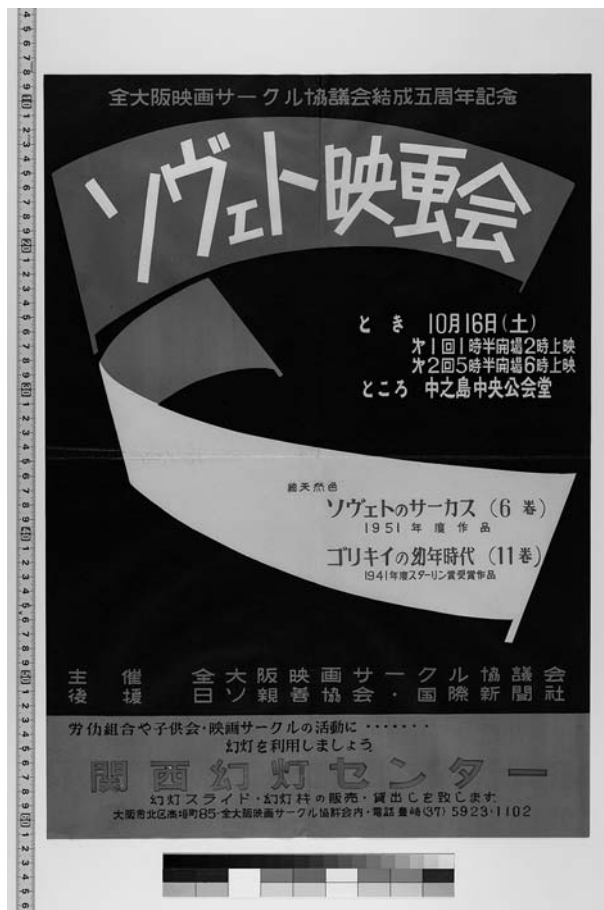
原秩序では個々の資料には資料番号がなく、原目録は、プラスチックの収納箱に付された箱番号と、箱内での分類を示すクリアポケットファイルの整理番号に拠って記述されていた。箱番号は、一部で複数の箱にまたがって「222-1」「222-2」のように付番され、単純に箱の番号ではなく箱の中身の意味単位を含意する箇所もあったが、多くは1つの箱に1つの番号という対応関係であったため、便宜的に箱番号と呼称している。分類を示すクリアポケットファイルの整理番号は単純な連番ではなく、補助的に使うハイフン・カッコ・丸囲みなどの記号の使用規則も一定ではなかったため、そのまま資料番号の一部として利用するには向かなかった。そこで、細目録作成の際に改めて個々の資料に統一的なルールで資料番号を割り振った。

資料番号は、「元の箱番号(3桁) - 新たな分類番号(2桁) - 連番(4桁)」とし、分類番号は原秩序・原目録における登場順序による連番、末尾の連番部分は分類内ごとに原秩序・原目録での順番に基づき1からの付番とした。先に触れたとおりもともと箱番号には欠番があり、さらに原秩序において図書・雑誌が収められていた箱の番号は細目録上には登場しないため、今後コレクションの資料群の細目録がすべて完成したとしても、資料番号冒頭3桁の「元の箱番

号」部分には番号の飛びが生じることになる。この箱番号に関しても連番で付番し直すことは可能であったが、クリアポケットファイルから中性紙封筒への移し替えの作業を通じて、「箱何番の資料」という概念は作業の割り振りや作業状況の報告・記録、細目録作成前の資料の一時的な出納などで既に研究班内で定着していたため、箱番号のみはそのまま資料番号に残した。

ただし、ポスターなど大型資料については、整理の初期の段階で抜き取りを行い、中性紙封筒の資料群とは別置保管していた。これらについてのみ原秩序とは異なる別ブロックとして「500-01-連番」という資料番号を振り、元の所属は「備考」欄に記すこととした。

資料現物への資料番号シールの貼付は未済であり、現物の出納は中性紙封筒が単位となる。クリアファイルの一つのポケットに同じ映画に関して複数の種類のポスター・チラシを収めているなど、同一表題の種類違いの資料が並んでいる箇所があり、番号シールの不在を補って類



(009-01-0241 より)

写真5 「ソヴェト映画会」ポスター

似資料を区別しやすくするために、細目録の表題欄に資料のサブタイトルに相当する部分や惹句部分も含めて採録していることがある。

なお、後述の写真撮影によるデジタル化済みの資料に関しては、資料写真と細目録の個々の資料情報との結びつけが可能であり、研究班用のオンラインの細目録では1資料単位で容易にアクセスできるようになっている。

クリアファイルの一つのポケットに同一資料が複数部収納されていた場合には、それらはまとめて1つの資料番号とし、「部数」欄に数量を記入した。別のポケットまたは別のファイルに同一資料があった場合には、資料の所属は変更せずそれぞれ独立した資料番号を与え、同一資料の存在について備考欄に注記した。



(009-01-0158 より)

写真6 映画「原爆の子」ポスター

2-4 資料発行年の特定

資料の発行年に関しては、資料中に発行年が明記されていなかったり時期を特定する決め手がないものも多かったが、複数資料の記述内容の相互参照から年や時期を特定できることが多々あった。たとえば、210-05-0101・500-01-0134などのチラシ・ポスターに登場する「希望映画会」は開催日として「12月7日」とあるが、年に関しては記載がなかった。プログラムや資料の体裁から開催年がおそらく1954年から数年内と思われるものの全大阪映画サークル協議会の機関紙にも言及がなく、採録過程で長らく正確な年は不明としていたが、214-02-0108「関映連ニュース」8号の記事から1954年と特定された。このように、現在細目録で発行年不明となっているものでも、今後の採録資料により判明する可能性がある。

また一方で、発行年月日が明記された資料でも一部に誤植や間違いがあった。たとえば009-01-0181「陽春の候……〔関西映画観客団体連絡会議発足の挨拶状〕」は、団体発足時における諸方面への活字印刷の挨拶状で、末尾には「昭和二十八年三月二十日」と記されており、山本明が1972年の自身主催の展示会に同資料を出展した際にはそのまま1953年の資料として説明のキャプションを付している。このように事実関係の年代比定の拠り所となりそうな資料にもかかわらず、他の複数の資料との照合から、発行年「昭和二十八年」は誤植であり、「昭和二十九年」が正しいことが判る。他にも、後から出てきた資料によって採録済み資料の発行年の間違いが判明することがあり、特に映サ運動初期の資料に関しては、他の資料も相互参照して慎重に発行年を特定する必要がある。

2-5 デジタル化と今後の課題

細目録の作成と並行して、資料のデジタル化（専門の撮影業者によるデジタル写真撮影）を順次進めている。先述のとおり中性紙封筒への移し替えて保存環境は大幅に改善されたが、より長期的な資料の保存と活用を見据えてのことである。現在、大型ポスターと中性紙封筒資料の一部の撮影が完了しているが、スケジュールや予算の都合もあり、全資料の完全なデジタル化には至っていない。

専門業者による撮影とは別に、細目録の作成作業及び研究班内での閲覧のために人文研にて簡易的に撮影したデジタル写真があり、現時点ではそれらも活用している。細目録の完成部分に関しては、専門業者による撮影写真か人文研で撮影した写真のいずれかが存在している。

資料群には映画会社が著作権を持つポスターなども含まれており、資料公開のルール整備や公開の場合の出納方法については今後の検討課題である。

3. 山本明コレクションの映画資料の概要

3-1 映サ運動の基本理念と組織構造

山本明は1949年から1977年まで全大阪映画サークル協議会の委員長としておよそ28年にわたり関西の映画サークル運動を牽引し、且つ意識的に関連資料の収集と保存に努めた。当事者であると同時にコレクターであったため、関西における映サ運動に関する極めて良質な資料群であることは論を俟たないだろう。

概要説明の前に、映サ運動の基本理念と組織構造をごく簡単にでも踏まえておくと、資料の概要や性格をよりイメージしやすいのではないかと思う。

戦後ほどなくして勃興する映サ運動の理念と目標は、究極的には「良い映画を安く見る」ということに集約された。個人の観客としては映画会社に対して何の力もないが、映画好きが集まってサークルを結成し、さらにそのサークル同士が結集して、映画館や映画会社に対して独自の動員力を持つほどに会員数を拡大できれば、会員割引などで有利な入場料を獲得でき、あるいは興行側だけの思惑で入場料をコントロールすることを阻止できるようにもなり、さらには製作される映画の方向性に関しても、一定の影響力を持ち得るようになる、という展望である。実際に映サと映画館の交渉で会員割引が効く映画は映サ運動家の好む狭義の「良い映画」だけにとどまらずもっと幅広かったから、「安く見る」という経済的実益は会員獲得の大きな原動力となった。しかしそれゆえに会員数の増加が「良い映画」の理解者の増加を意味するとは限らなかった。

映サの組織の仕組みにも似たような側面を見て取ることができる。都道府県や大都市で作られた映画サークル協議会は、それより小さな単位の地域や職場における同好の集りである小規模な映画サークルを加盟の単位としている。たとえば1954年時点の全大阪映画サークル協議会では、3人以上の映画好きが集まって地域や職場で映画サークルを作り、その代表が会員1人あたり月20円の会費を取り纏めて協議会に支払えば、協議会に加入することができた(210-05-0011「映画サークルの手引き」)。加入に際して理念を問うことはなく、映サは結成当初に山本明自身が認識しているとおりの「極めてゆるい組織」(211-05-0001「[山本明自筆メモノート]」)であった。こうした基準の緩さは会員拡大の利点ともなるが、会員数の増加が理念の浸透には直結しないことも意味していた。

このように、映サ運動は、理念の面でも組織の面でも、緩さが武器となりまた弱点ともなるという二面性を抱える中で展開されていた。山本明コレクションの映画資料は、映サ運動の存在意義を自問し続けた苦闘の証とすることができる。ただし上記の整理はごく大枠でのことであり、1958年に古志俊が滝沢一の映サ運動批判に対して「一口に映画サークルといっても京都、神戸、鹿児島、松山、名古屋、東京ではかなり性格の異なった運動を行っている」(214-

02-0127「関映連会報」18号、1958年9月15日発行）と指摘しているように、実際の映サ運動の有り様には地域性もあった。そういった詳しい分析については今後の研究を待ちたい。

3-2 細目録の分類と資料点数

まず、現時点（2020年9月時点）で細目録の作成が終わっている部分に関して、各分類名と資料点数をまとめておく。大分類「映画」のうち箱214の一部・215・216・219・220の細目録が未完であり、その他の大分類については大半が作成開始に至っていない。

009-01 展示物 318点

210-01 全大阪映画サークル協議会機関紙 365点

210-02 「若者たち」全国上映委員会資料 23点

210-03 映画サークル全国連絡会議 2点

210-04 全大阪映画サークル協議会資料1 4点

210-05 全大阪映画サークル協議会資料2 125点

210-06 ベトナム・若者など自主上映運動 94点

210-07 映サ・独立プロ等資料 47点

211-01 サークル運営資料1 164点

211-02 サークル運営資料2 181点

211-03 全大阪映画サークル協議会資料3 59点

211-04 全国映画サークル運動資料 93点

211-05 大阪映画サークル初期資料 78点

211-06 事務局ニュース等 116点

211-07 全大阪映画サークル協議会資料4 183点

212-01 日映演・独立プロ等資料 180点

212-02 「若者たち」製作チラシ・台本ほか 30点

212-03 映画関係資料（邦画） 140点

212-04 映画関係資料（洋画） 76点

212-05 映画関係資料（ベトナム・キューバ・朝鮮） 36点

212-06 新聞切り抜き 1230点

213-01 映画サークル各地機関紙 1607 点

214-01 関西映画観客団体連絡会議資料 156 点

214-02 映画観客団体全国会議資料 43 点

217-01 日本映画復興会議 54 点

217-02 映画学習資料 6 点

217-03 映画教室 2 点

218-01 洋・邦画各種チラシ 191 点

500-01 別置大型資料 1 139 点

先述のとおり、また上記一覧からもわかるとおり、山本明資料の分類は単純な時代順ではなく発行主体別・刊行物別・テーマ別が入り混じっている。さらには一つの分類が複数のテーマの資料を含んでいたり、逆にあるテーマの資料が複数の分類に散在していることがある。そのため、資料概要を単に箱番号の先頭から各ブロックの登場順（上記の順番通り）に紹介すると説明に時期の前後が生じたり、一つのテーマに関して複数の箇所度々言及したりすることになる。そこで、山本明の映画サークル活動の概要を、なるべく説明の前後が生じないよう時代順とテーマ別で整理しつつ、このときの資料、この取り組みの資料がこのブロックに収められている、という形で説明を進めていきたい。

3-3 映画資料の概要

山本明コレクションの映画資料の概要は、ごく大まかには次の7つの分類で俯瞰するのがわかりやすいのではないかと思う。

- ① 戦後初期、大阪映サ結成前の資料
- ② 大阪映サ内部の運営資料や実務資料
- ③ 大阪映サの機関紙・刊行物・チラシなど会員向けの発行資料
- ④ 「良い映画」の製作支援・上映運動・独自上映会に関する資料
- ⑤ 映サ協議会同士の連携組織の運営や他団体との交流の中で集積した資料
- ⑥ 映画館や映画会社との交流の中で集積した映画館・映画会社によるポスター・チラシ・プレスシート

⑦ 映画に関する新聞記事のスクラップ

以下、これらに沿って概説する。ただし細目録の未完部分に上記のいずれにも当てはまらない資料が残っている可能性があり、本稿での説明における暫定的な分類である。

① 戦後初期、大阪映サ結成前の資料

大阪映サ結成前、戦後初期の文化運動や関西労映の資料については、「009-01」「211-05」に収められている。また、日映演の東宝争議関連資料が「212-01」にある。「211-07」の一部にも初期資料が含まれている。

「009-01」は原目録の大分類「前展示物」に当たり、1972年4月1日の大阪文団連一周年総会の会場に於いて山本明が開催した、「1946-1950 関西を中心とした民主的文化運動（特に映画、演劇）のポスター資料展」の展示資料である。一部、大分類「映画」の資料との重複はあるものの、山本明自身が展示用に特に選んだだけあって貴重資料が多く、また原秩序においてまとまった形で保管されていたため、優先的にデジタル化と採録を行った。「009-01」には、日本民主主義文化連盟での活動資料や関西労映結成時の資料、新協劇団・前進座・俳優座・文学座の舞台公演ポスター・パンフレット、邦画「山びこ学校」「日本戦歿学生の手記 きけ、わだつみの声」「どっこい生きてる」「ひろしま」、洋画「自転車泥棒」「禁じられた遊び」のポスター等々、展示のタイトル通り、戦後まもなくの関西における文化運動や映画・演劇に関する貴重なコレクションが含まれている。

「211-05」は原目録の箱211の分類「大阪映画サークル初期資料」であり、細目録でもそのまま分類名とした。ここにも一部、国民文化会議や日本民主主義文化連盟の資料がある。そして大阪映サ結成初期の資料が収められており、211-05-0003「映画サークルの出来る迄」（執筆年不明、山本明筆）、211-05-0001「山本明自筆メモノート」（1950年頃）には、日本共産党との関係も含め、1949年の全大阪映画サークル協議会結成前後の経緯と内情が記されている。山本明自身は共産黨員として党の思想や方針に沿った理想と目標を具現化すべく映画サークル運動・文化運動に奔走したが、党と映サの関わりは映サの内部運営資料にも機関紙の記事上にも直接的には現れない。全体として資料群は映サの発行資料が中心であり、山本明執筆の文章も映サ媒体を通して発表されたものが多いため、これらの初期資料は貴重である。

「212-01」に1948～1950年頃の日本映画演劇労働組合（日映演）の東宝争議資料がある。「211-07」はかなり様々な発行主体・発行時期の資料が集められているが、一部に東宝争議や大阪映サ結成前・結成初期の資料が見られる。

② 大阪映サ内部の運営資料や実務資料

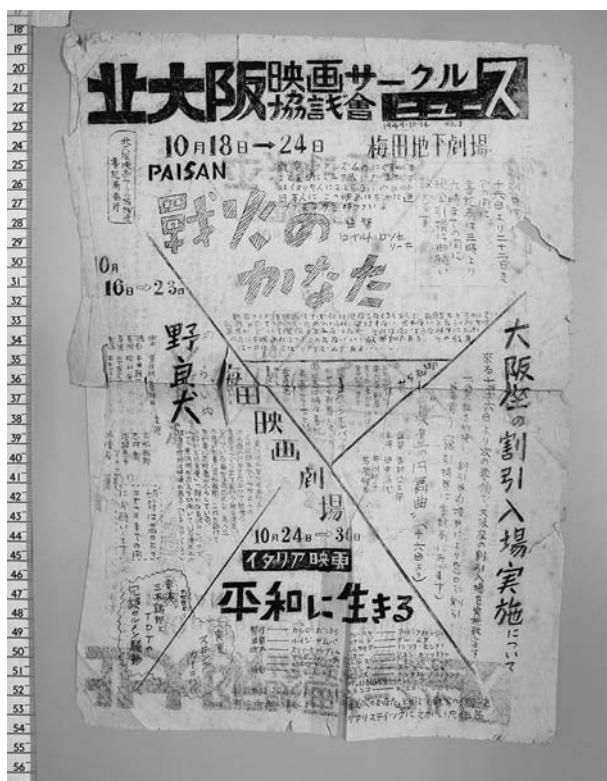
映サ結成後、委員会の議事報告や会計報告などサークル運営資料が収められているのが、「211-01」、「211-02」である。前者には総会・専門委員会の開催通知や議事報告、後者にはサークル指導部である常任委員会の開催通知や報告と分けられており、原秩序における資料群の丁寧な整理と分類の跡が窺える。資料の対象時期は1952～1973年頃までで、映サ最初期のものと1970年代半ばから後半のものが含まれていない。開催通知の議題や議事報告から、映サのその時々に関心事や課題、問題意識を追うことができる。

映サ結成初期からその後の運営においてサークル指導部のあいだで一貫して危惧されているように、映画サークル運動は「良い映画を安く見る」というスローガンの「良い映画」の部分にいかにも高邁な理想を込めてその普及や啓蒙を図るかという課題に常に自覚的でなければ、思想性を欠いた単なる会員割引を提供するチケット仲介団体と化してしまうおそれと背中合わせだった。

同時に、会員数の増加と維持のためには「安く見る」の部分も極めて重要で、会員割引の提供は映サの生命線でもあった。1953～54年頃の勧誘リーフレット「映画サークルの手引き」(210-05-0011)では、映サ活動のス

ローガンを列挙する際に「1. 映画を安く見る仲間をつくろう 2. みんなでよい映画をえらぼう（後略）」と書かれているように、「安く見る」は「良い映画を選ぶ」よりも先頭に置かれていたのである。

結成から21年が経過した1971年1月の「常任委員会案内〔開催通知〕」(211-02-0161)に掲載された討議メモでは、東宝争議以来の独立プロの映画製作をめぐる歴史をかなり批判的に総括した上で、映サ運動のあり方についても厳しい自己批判が提起されている。映サ運営は、黎明期からその後々に至るまで、常にこうした危機意識の上にあった。



(210-01-0001より)

写真7 「北大阪映画サークル協会ニュース」創刊号

③ 大阪映サの機関紙・刊行物・
チラシなど会員向けの発行資料

「良い映画」という理想の啓蒙と「安く見る」という実益に関する案内を会員に提供する手段として、当然ながら会員向け機関紙の発行は映サ活動の大きな柱の一つであった。大阪映サの機関紙は「210-01」に収められている。一部欠号はあるが、全大阪映画サークル協議会の前身である北大阪映画サークル協議会による1949年10月発行の機関紙創刊号から、山本明の亡くなる1977年4月発行の404号まで、ほぼすべての時期をカバーしている。最初期に何度か改題を経ているが、1951年から1957年半ばまでが「大阪映画の友」、それ以降は「大阪映画サークル」というタイトルで発行された。

機関紙は、会員数の増減による予算面や機関紙にどれほどの重点を置くかという活動方針の影響を受けて、時期によって印刷方法（謄写版、活字版）・判型・頁数などの体裁、紙面構成に変遷がある。充実期には活字印刷のタブロイド判で、撮影所を訪れて岸恵子・久我美子・香川京子・宇野重吉ら映画スターに対して編集部が独自に取材して巻頭記事に据えたり、北川鉄夫・岩崎昶ら有名映画評論家の寄稿を受けるなど、読み応えがあるものに仕上がっている。それとは対照的に、予算不足に苦しみ、割引館の案内のみしか提供できない時期もあった。読者投稿欄に、ソ連・中国映画の妄信的礼賛は御免被りたい、映サ運動の限界が見える、などの意見が掲載されたり（210-01-0019「大阪映画の友」9号、1951年5月15日発行）、会員との距離感や温度差も垣間見える。

機関紙以外にも、時期によって「ファン・ニュース」、「事務局ニュース」など様々な会員向け定期刊行物があり、それらは主に「211-06」に収められている。加入の勧誘リーフレットやその時々話題・問題に関する不定期のチラシなども多数残されており、「210-05」「211-07」その他いくつもの分類に散在している。



(210-01-0076より)

写真8 「大阪映画の友」62号

④「良い映画」の製作支援・上映運動・独自上映会に関する資料

機関紙の発行の他に、サークルの存在意義を打ち出す大きな機会となったのが、「良い映画」への積極的関与、すなわち民主映画・反戦映画・労働映画の製作支援や上映支援、自主上映運動、独自に企画した上映会の開催であった。「良い映画」には、独立プロの映画だけでなく、大手映画会社による「良心的」な映画も含まれる。ソ連・中国・ベトナム・キューバ・北朝鮮など社会主義諸国の映画の紹介にも熱心であった。

映サ初期において特に関連資料が多い映画は1951年の「どっこい生きてる」で、同映画に対しては大阪映サを含め全国の映サが製作資金のカンパや上映促進運動を展開した。それらに関する資料は「009-01」「210-05」「210-07」「211-04」「211-05」など多くのブロックに散在している。また、「210-07」は原目録では明確な分類名が付されていなかったが、映サが製作や上映を支援した新星映画・北星映画・独立映画など独立プロに関する資料が比較的多く集められている。

「どっこい生きてる」よりもかなり時代は下るが、自主上映運動で特に資料数が目立つのが、1968年からの「若者たち」3部作である。主に「210-06」に上映運動資料、「212-02」に製作側資料が収められているが、その他の分類にも数多く関連資料が見られる。

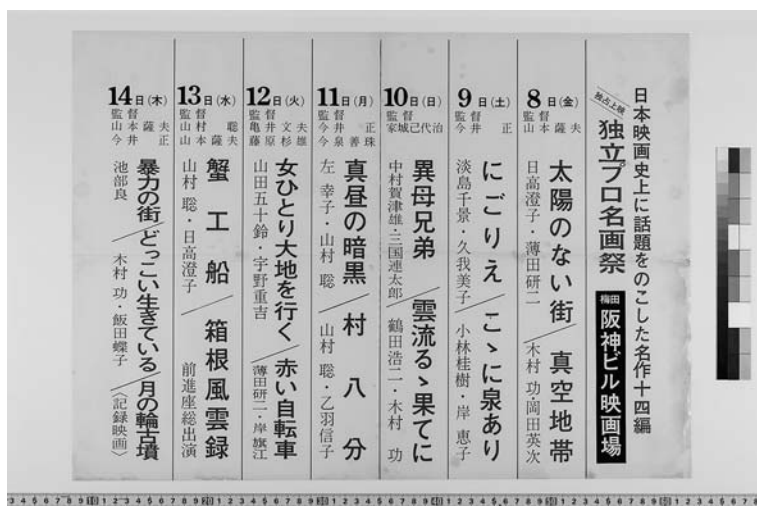
1950年代に展開されたソビエト映画「戦艦ポチョムキン」の輸入運動と1959年に実現した非商業の上映会に関する資料は、「212-01」「213-01」などに収められている。「210-06」には1969年の「キューバの恋人」「ベトナム」の上映運動の資料もある。

ソ連映画に関しては資料数が多く原目録でも特に分類が設けられており、箱220に収められ



(500-01-0050 より)

写真9 「戦艦ポチョムキン」福岡上映会ポスター



(500-01-0066 より)

写真10 独立プロ名画祭ポスター

ている。その部分の細目録は未完である。

なお、2020年9月時点の細目録の「映画タイトル」欄に登場する映画の上位20件を集計したところ、「どっこい生きてる」(登場資料点数164点)、「若者たち」(150点)、「戦艦ポチョムキン」(118点)、「ベトナム」(106点)、「若者はゆく」(96点)、「橋のない川」(93点)、「真空地帯」(72点)、「暴力の街」(68点)、「原爆の子」(63点)、「ドレイ工場」(62点)、「米」(62点)、「若者の旗」(61点)、「ここに泉あり」(59点)、「ひめゆりの塔」(55点)、「無防備都市」(55点)、「ひろしま」(52点)、「箱根風雲録」(51点)、「太陽のない街」(49点)、「キューバの恋人」(48点)、「山びこ学校」(48点)となっていた。ただし、各資料における映画の取り上げられ方は、機関紙で特集が組まれているものから委員会の議事報告の中に少しの言及があるだけのもので濃淡は様々であり、登場資料数それ自体が定量的に直接の意味を持つものではない。

独自の上映会に関しては、サークルの希望映画を鑑賞する小規模なものは初期から催していたようだが、明確に理念やテーマを打ち出して比較的大きな規模で開催したものとしては、1966～1967年の2回に渡る「独立プロ名画祭」がある。原目録の「箱215」に分類が設けられて開催時の資料が収められているが、残念ながらここも細目録の作成が追いついていない。「独立プロ名画祭」に関しては、今回の細目録では「500」にポスターがある他、「210-01」の機関紙でも取り上げられている。

その他、1953～1954年の「平和映画まつり」、1955年の「時代映画を激励する夕」、1960年代半ば以降の「土曜劇場」、1970年代の「希望映画会」など、大小様々な主催上映会の資料が複数のブロックに見られる。

⑤ 映サ同士の連携機関の運営や他団体との交流の中で集積した資料

映サ運動を全国展開しようとする上で各地方の協議会の連携が求められたが、はっきりした形で関西の連絡機関が組織化されるのは1954年である。同年、大阪映サの主導で関西映画観客団体連絡会議（関映連）が結成され、山本明が議長となった。「214-01」には関西映画観客団体連絡会議、「214-02」には各地方の連絡会議が集まる全国会議の資料が集められている。

連絡機関は、運動方針や理念の共有という側面だけでなく、会員割引が脅かされるという現実的な危機のときにも存在意義を発揮した。先述のとおり会員割引は映サの生命線であったが、1957年の環衛法（「環境衛生関係営業の運営の適正化に関する法律」）成立に端を発した、東京都の観客団体に対する興業組合の割引停止の予告は、関西の各地方の映サにも危機意識を呼び起こし、各地の興行側の動向について情報共有が図られている。

細目録上で関映連の活動が確認できるのは1960年の第13回総会までで、それ以降の発行資料は見当たらない。その前後の全国組織としては、「211-04」と「214-01」に1949～1952年の



(213-01-727 より)

写真 11 「八戸映画愛好会会報」26号

全国映画サークル協議会の資料、「210-03」に2点のみではあるが1974年の映画サークル全国連絡会議機関紙が見られる。

「217-01」には、大阪映サが事務局として関わった日本映画復興会議の第1回関西集会及びその前後の全国大会に関する資料が集められている。

「213-01」はコレクションとして白眉で、上記関映連の活動や映サ同士の交流の中で収集したと思われる、全国各地方の映画サークル機関紙が収録されている。発行年が明記されているものとしては1948年から1975年までに及び、地域を登場順に列挙すると、神戸、京都、尼崎、西宮、大津、高槻、和歌山、奈良、姫路、岡山、東播磨、玉島、広島、鳥取、米子、名古屋、伊勢崎、諏訪、長野、松本、岐阜、津、函館、八戸、秋田、盛岡、鹿児島、福岡、八幡、宮崎、大牟田、別府、松山、高松、高知、徳島、新居浜、丸亀、宇和島、大宮、福井、前橋、岡谷、浦和、川口、熊谷、仙台、日立、沼津、浜松、東京、川崎、熱海、横浜などである。地域サークルの他、一部、職場の映画サークルの機関紙も含まれていた。

各機関紙の全号が揃っているわけではないが、創刊号を含むことも多く、映画サークル間の相互影響や地域性を分析できるかもしれない。

箱213は原目録では機関紙ごとに細かく分類が分かれていたが、途中、同じ機関紙が複数の箇所に分かれるなど入り組んでいるところが多々あったため、細目録では資料順序は原秩序のまま「各地サークル機関紙」として1つの分類とした。

⑥ 映画館や映画会社との交流の中で集積した映画館・映画会社によるポスター・チラシ・プレスシート

映サは観客団体として映画館や配給会社との交渉もあり、それらの作成したポスター・プレスシート・チラシ・スチルの類も多数残されている。映サが応援する「良い映画」に関するものが多いが、通俗的な作品のポスター・チラシも数多くある。大型のポスター・プレスシートに関しては「009-01」「500-01」に収められている。前半でも触れたが、「500-01」は原目録の分類ではなく、整理初期の別置大型資料のために細目録作成時に作った分類であり、元の所属箇所はばらばらである。

小型のチラシやプレスシートに関しては、「212-03」に邦画、「212-04」に洋画、「218」に洋・邦画、「212-05」に「ベトナム・キューバ・北朝鮮」が集められているが、特に目立つ上映運動があって原目録で分類が立項されている場合には、そちらの分類に収録されていることもある。細目録の未完部分である箱215の一部に洋画チラシ、箱218にも邦画・洋画のチラシがある。

⑦ 映画に関する新聞記事の切り抜き

「212-06」に、1955年から1976年までの、主に朝日新聞・毎日新聞・神戸新聞・赤旗（1966年1月以前は「アカハタ」）に掲載された映画関連記事の切り抜きが集められている。掲載紙名・掲載日については、それらを示す欄外部分とともに切り抜かれた記事もあったが、切り抜きに書き込まれた手書きのメモに拠ることも多く、中にはメモがなくて掲載紙・掲載日とも不明のものもあった。紙名・掲載日の典拠がメモ書きの場合にはその旨備考欄に注記しており、引用の場合には原紙を確認する必要がある。

スクラップの範囲は、映画に関する記事を取捨選択せず網羅的に切り抜いたというわけではないようだが、映サに関する記事や「良い映画」に関する記事に限定されておらず、もっと幅広い関心に基づいて切り抜いていたようである。

4. お わ り に

概要は以上だが、細目録の完成部分に限定しても、全容と細部に関して説明を尽くしたわけではなく、資料群の主要な部分をまとまりとして比較的記述のしやすい形でなぞったに過ぎない。それほどに山本明コレクションの映画資料は多彩であり、その全容は今後細目録が公開された際にご覧いただきたい（公開時期等、詳細は現時点では未定）。本号では、全大阪映画サークル協議会の機関紙が収められた「210-01」ブロックの細目録を掲載している。またコレクションには、映画資料以外にも、戦前から戦後初期にかけての演劇資料・文化運動資料なども多数含まれている。

この特集号でも様々な論点から資料が取り上げられているが、いずれ資料公開の暁には、いっそうの活用が期待される。それこそが、運動家にしてコレクターだった山本明の望むところだろう。

要 旨

本稿では人文研が2016年に受け入れた山本明コレクションについて、図書・雑誌以外の資料群の概要と研究班による整理方針を概説する。山本明（1911～1977年）は運動家として1949年から1977年にかけて全大阪映画サークル協議会の議長を務め、大阪の映画サークル運動を牽引するとともに、自身の活動に関連する資料の収集・保存にも注力した。運動の当事者であると同時に熱心なコレクターであったため、コレクションは関西の映画サークル運動に関する非常に貴重な資料群である。

山本明コレクションの映画資料は、自身が運営していた全大阪映画サークル協議会の運営資料や機関紙・刊行物の他、映画サークル同士の連携組織の資料、他のサークルの機関紙、映画会社・映画館のポスター・チラシ、新聞切り抜きなど多岐にわたる。人文研による整理を通じて保存環境を改善し、研究利用のための詳細な資料目録を作成するとともに、写真撮影によるデジタル化も進めている。今後、公開のルールを整備し、研究への本格的な活用が待たれる。

キーワード：山本明、映画サークル、文化運動、コレクション、カタログング

Abstract

Institute for Research in Humanities accepted the donation of the Yamamoto Akira Collection in 2016. Yamamoto Akira (1911-1977) was an activist and had represented the integrated organization of film audience circles at Osaka from 1949 to 1977. He had lead film circle movement, and had enthusiastically collected documents and literatures which have relation with his activity. Because he was both the central player and proactive collector, his collection is very valuable to know details about film circle movement of Kansai area.

The Yamamoto Akira Collection includes a wide variety of documents and literatures, which were published by his own organization, the friendly circles, film companies and theaters. Now we are archiving and digitizing them for future reference and researches.

Keywords: Yamamoto Akira, film circle, cultural movement, collection, cataloging